

地域資源創成学部における学際性の理解を促す 教育プログラムの開発と実践

戸敷浩介¹，西和盛¹，山崎有美¹，芦田裕介²，近藤友大³

1. 宮崎大学地域資源創成学部

2. 神奈川大学人間科学部

3. 京都大学大学院農学研究科

Development and Implementation of Educational Program for Understanding of Interdisciplinary in the Faculty of Regional Innovation, University of Miyazaki

1 Faculty of Regional Innovation, University of Miyazaki

2 Faculty of Human Sciences, Kanagawa University

3 Graduate School of Agriculture, Kyoto University

Kosuke TOSHIKI, Kazumori NISHI, Yumi YAMASAKI, Yusuke ASHIDA
and Tomohiro KONDO

要旨

本稿は、2016年4月に新設された宮崎大学地域資源創成学部の学際性を、初学者に分かり易く伝えるための取り組みである「地域資源創成学入門セミナー」の開発と実践の経緯と、それに取り組んだことによって得られた成果と課題、更に「地域資源創成学」における学際性について考察したものである。

1章では、高校生や大学一年生を対象とした「地域資源創成学入門セミナー」の開発における考え方と、これまでに3回実施したセミナーにおける成果及び課題についてまとめた。地域資源創成学部が様々な分野で構成されていることと、地域課題に対して複眼的視点を持つ重要性は伝えられたと考えられる。2章では、既存の専門分野の成立過程や地域学における議論を参考にしながら、地域資源創成学の学際性について考察し、その上で本学部の専門家間で議論することの重要性を述べた。

はじめに

宮崎大学地域資源創成学部は、2016年4月に宮崎大学の5つ目の学部として新たに設立された。新設学部の背景に関して本学部の設置計画書では、少子高齢化や人口減少、国際競争力の低下など複雑化・多様化した諸課題に対して、従来の専門分野の深化のみではなく、分野横断的な知識とスキルが不可欠と指摘している。そして、地域の課題や価値を複眼的視点から捉えるために必要な社会・人文科学、及び農学・工学の利活用技術の基礎知識を備えた、新たな異分野融合教育を実施する学部が必要だと述べている。

2013年5月の教育再生実行会議による第三次提言「これからの大学教育等の在り方について」において、技術と経営を俯瞰できる人材の育成を図るための大学における文理横断型プログラム開発への支援や、全ての学生が文系理系双方の基礎知識を習得する取り組みの促進という形で、異分野融合教育の重要性が強調されている⁽¹⁾。こうした地域課題や社会的要請に対応する新たな異分野融合教育を行うために設立された地域資源創成学部は、設立時には表1に示す

地域資源創成学部における学際性の理解を促す
教育プログラムの開発と実践

表1 地域資源創成学部設立時の教員構成

① 経営学分野	④ 社会学分野
経営学（組織）〔実〕【企マネ】	農村社会学〔研〕【創造】
マーケティング〔実〕【企マネ】	地域社会〔実〕【創造】
経営学（経営戦略）〔実〕【企マネ】	コミュニケーション〔研〕【企マネ】
マーケティング（デザイン）〔実〕【産業】	⑤ 工学分野
マーケティング（コンテンツ）〔実〕【産業】	都市計画〔研〕【創造】
経営学（ベンチャー）〔研〕【企マネ】	交流マネジメント〔研〕【創造】
会計学〔研〕【企マネ】	環境（リサイクル・環境保全）〔研〕【創造】
② 経済学分野	⑥ 農学分野
財政学〔研〕【創造】	栽培学〔研〕【産業】
地域経営〔研〕【企マネ】	畜産動物学〔研〕【産業】
地域振興〔実〕【産業】	農業経済学（研究者）【産業】
③ 法学分野	食品製造学〔研〕【産業】
民法〔研〕【創造】	
労働法〔研〕【創造】	
憲法/行政法〔研〕【創造】	
自治体経営〔実〕【創造】	

〔研〕：研究者教員 〔実〕：実務家教員 【企マネ】：企業マネジメントコース，【産業】：地域産業創出コース，【創造】：地域創造コース

専門分野の教員24名で構成された。この内、前職で実務に携わっていた8名が実務家教員と位置付けられており、専門分野や経歴が多様な教員組織となった。

本学部が設置される前年度には、地域資源創成研究センターという前身組織が立ち上げられた。筆者らも初めはこのセンターに着任し、学部新設のための準備に携わった。センター教員の主な仕事は、学部一年次の講義や実習の準備、研究環境の構築と、新学部の広報であった。特に、推薦入試や前期・後期の入学試験の受験者数を確保するため、新学部の内容や魅力について、宮崎県内外の高校生らに広く周知する必要があった。そのため、多くの高校を訪問し、進路指導担当教諭との面談で新学部の説明を行い、時には「出前講義」として高校生に本学部の教育研究について直接話をした。

しかし、このような活動を通して、筆者らは2つの大きな課題に直面した。

1つ目は、「異分野融合」や「学際性」に関して、高校側に馴染みがないことである。普通科の高校では、大学受験を見据えて高校2年生または3年生の進級時に、文系・理系にクラスが分かれることが多い。これは、従来の学部が大学受験の視点からは文系・理系にほぼ分けられており、センター試験や二次試験の受験科目も文系なら国語系科目と社会科系科目、理系なら数学系科目と理科系科目が中心となっているためである。日本の教育における専門深化は高校教育から始まっており、その中で自らを文系または理系と位置付けた高校生に対し、異分野融合や学際性への興味関心を喚起することは難しい。

2つ目は、高校生らに説明する本学部の教員自身も、従来の大学や大学院教育における専門深化の過程を辿って自らの専門性を深めてきた専門家であり、異分野融合や学際性の意義を理解はしていても、十分に体現しているとは言い難いことである。その上、多くの教員はそれま

で「地域」という視点を意識しながら研究や実務を行っていたわけではない。つまり、「地域資源創成学」の一部を教授するのではなく、各々の専門分野を学生に教授するために集まっている。このことから、高校生らに対し異分野融合のロールモデルを示すことが難しいという課題があった。そもそも本学部が目指す「異分野融合」という言葉について、他者への説明等で繰り返す内に、「融合」とはどのような状態なのか、「異分野融合」と「異分野連携」はどのように異なるのか、そして学問分野として確立している状態とはどのようなことなのかなど、教員自らが理解しておかなければならないことに気が付いた。

高校訪問等の活動をする中で、こういった2つの課題にすぐに直面した筆者らは、高校生らに本学部を説明するためのワークショップ形式の教育プログラム構築を試みることにした。その構築の過程で、「異分野融合」や「学際性」について専門分野が異なる教員間で議論をし、教員自身が理解を深めていくことも目的としていた。このような考えの下、高校生を対象とする取り組みを始め、2016年3月『女子高生のための地域資源創成学入門セミナー』、2016年11月『高校生のための地域資源創成学入門セミナー』を実施し、2018年2月には本学部一年生対象の講義「専門教育入門セミナー」の一環として『大学一年生のための地域資源創成学入門セミナー』を実施した。

1章では、この3回の取り組みを通して構築してきた教育プログラムの内容とその成果・課題を整理し報告する。2章では、地域学における議論を参考にしながら、このセミナーの開発と実践に関わった教員間で交わされた地域資源創成学に関する議論について紹介する。

1. 「宮崎の茶業の活性化」をテーマとした教育プログラム

1.1 テーマ設定

筆者らがこのような教育プログラム構築を考え始めた頃に、日本学術振興会から「ひらめき☆ときめきサイエンス」(高校生以下の児童・生徒を対象に科学の面白さを発信するための事業)の公募が始まった。そこで、筆者らはこの事業への応募を念頭に、教育プログラムのテーマ作りに着手した。

ここで最も重視したことは、本学部を構成する専門分野が決して文系だけではないことを、高校生に周知するため、文系と理系のいずれの専門分野も含むプログラムを構築することである。高校訪問等の活動を通して、当時の本学部は文系学部と認識されていると感じられたからである。そもそも学問分野の中には、文系または理系の範囲に収まらない分野が既に存在している。そこで、まずは農業と地域経済を大きなテーマとして設定し、文系と理系のいずれの要素もある農業経済学を軸に据え、これに加えて栽培学、食品製造学、マーケティング(デザイン)、農村社会学、環境(リサイクル・環境保全)の各教員が集まり、具体的なテーマを検討し始めた。

まず、具体的なテーマ設定の際の条件を整理した。教育プログラムの目的は、地域資源創成学部が様々な専門分野の視点から座学や実習を行って、地域課題を多角的に捉える学部であることを、高校生らに伝えることである。しかも入試広報の側面を有しているため、当面は地元の高中生らを対象に行うことを想定していた。従って、座学とグループワークを取り入れることと、主に宮崎県の地域課題を取り上げることが条件とした。そこで提案されたテーマが、「宮崎県の茶産業の活性化」であった。

宮崎県は茶の生産量が全国4位(2016年当時)であるが、静岡県や鹿児島県、京都府等の他の府県に比べて著しく知名度が低い。また、宮崎県の茶産業は生産量に比して十分な利益を

地域資源創成学部における学際性の理解を促す
教育プログラムの開発と実践

表 2 各専門分野からみた宮崎県の茶業（または茶）への視点

農業経済学	宮崎県の茶産業は生産量に比して利益を得られていない。宮崎県の中山間地で生産される釜炒り茶は、新たな価値を提供する可能性がある。
栽培学	煎茶は平地でうま味重視の多肥栽培を行うが、釜炒り茶は中山間地で香り重視であり施肥量が少ないという特色がある。
食品製造学	茶にはポリフェノール等の機能性成分が豊富で、飲料用以外にも様々な食品に加工されている。
マーケティング (デザイン)	茶葉や緑茶のペットボトルのパッケージデザインは消費者の購買意欲を喚起するための工夫が施されており、ブランドイメージを醸成することが出来る。
農村社会学	茶の生産地、特に釜炒り茶の産地である中山間地域は、少子高齢化が進み後継者不足が深刻化している。また、同時に耕作放棄地が増加している。
環境科学	煎茶はうま味を得るために多肥栽培を行っているが、地下に溶脱する硝酸イオンが地下水の硝酸態窒素汚染や閉鎖性水域の富栄養化に繋がる可能性がある。

得られていない状況だった。そこで、宮崎県の茶業、または単に茶そのものについて、上記の専門分野の視点を表2のように整理した。

地域課題としての宮崎の茶業の活性化を様々な専門分野から多角的にみてみれば、世間に広く広報するだけでは不十分であることが分かる。例えば、日本において好まれるうま味の強い煎茶を量産することと、そのための多肥栽培が環境負荷に繋がることのように、トレード・オフの関係にある場合もあるからだ。つまり、こうした地域課題は特定の専門分野だけでは解決できない課題であり、様々な専門分野から多角的に分析した上で、総合的に最良と考えられる方向性を導き出す必要がある。そこで、高校生にこれらのことを体感してもらうため、まず座学で各専門分野からの視点について講義し、その上で「宮崎県の茶業の活性化案」をグループワークで考えるという教育プログラムの骨子を構築した。そして、ワークショップにかけられる時間的制約や受講する対象によって、テーマの細部などを臨機応変に変えることにし、一連のワークショップを「地域資源創成学入門セミナー」という名称で呼ぶことにした。

1.2 女子高生のための地域資源創成学入門セミナー（2016年3月）

日本学術振興会の「ひらめき☆ときめきサイエンス」の採択を目指して構築した「地域資源創成学入門セミナー」だが、結果は不採択であった。しかし、宮崎大学清花アテナ男女共同参画支援室が主催し、他学部の教員が多く関わっていた「女子高生のためのサイエンス体験講座 in 宮崎大学」（対象：高校1、2年生の女子生徒）が2016年3月に開催されることを知った。既にプログラムは出揃っており、高校生の申し込みの締め切りも過ぎていた。そこで、このプログラムの応募に抽選で外れた女子高生に対し、「女子高生のための地域資源創成学入門セミナー」を同日開催する旨を通知した。その結果、10名から参加希望の回答を得て、最初のセミナーを実施することになった（実際の参加者は女子高生9名）。ただし、既に食品製造学の教員が他のプログラムに協力予定だったこと、そもそもの主旨が女子高生に対する理系学部の広報であったことから、このセミナーでは農業経済学、栽培学、環境科学の視点に絞り、グループワークのパートはディスカッションではなく、グループで簡単な実験を行って結果を考察させることにして実施した。

プログラム前半は宮崎の茶業の現状や、日本の茶市場がうま味重視であることなどを座学で講義し、実際に茶を淹れて飲み比べながら体験的に学ばせた。そして後半では、作物の成長を支える土に焦点を当て、土が担っている役割や作物が異なる畑の土壌の物理性と化学性、肥料由来の硝酸イオンが周辺水環境に与える影響等の講義を行った。講義の後に、実際の畑の土を用いてpHやEC（電気伝導率：土壌中の塩類濃度の指標であり、特に硝酸イオン濃度と相関があるとされている）の測定を行い、茶畑のpHやECが高いことなどを体験的に学ばせた。受講した高校生9名には簡単なレポートを課し、感想・コメント・質問・要望等も含めて記入の上、数日後に各高校の教員を通して提出してもらった。

レポートの内容から、9名とも講義や実験の内容が理解できていたことが分かった。また、感想やコメントなどでは「地域資源創成学部には理系分野があると思わなかった」、「お茶ひとつにしても、地域の文化、環境、産業などいろんなところにつながりがあっておもしろいと思いました」、「お茶の話も土壌の話も最後にむすびついてびっくりしました」等、地域課題を多角的に捉えることに繋がるコメントがあった。なお、この時の受講者9名の内1名は、本学部の入学試験に合格し2017年度に入学した。

1.3 高校生のための地域資源創成学入門セミナー（2016年11月）

続いて同年11月には、宮崎大学の学園祭『清花祭』に合わせて実施されている「WAKUWAKU体験DAY」の一環として、「高校生のための地域資源創成学入門セミナー」を開催した。プログラムは2部構成にし、第1部では座学による講義、第2部ではグループワークを行った。事前申し込み制にしたところ、第1部に20名の参加希望があり、内9名が第2部まで通しで参加することになった。第1部では、受講者20名に対して農業経済学の観点から宮崎県の茶業の現状について、食品製造学の観点から茶の機能性成分について、そしてマーケティング・デザインの観点から茶葉や茶のペットボトルのデザインについて講義を行った。第2部では、第1部で学んだ知識を参考にしながらロールプレイ方式のグループワークを行った。ロールプレイでは、「生産者（茶農家）」と「流通業者（茶商）」、「自治体職員」の役割を各受講者に与え、その立場になったつもりで、宮崎の茶を使った地域活性化の企画を立てさせた。これは、立場によって意見が分かれることを受講者に知ってもらうためである。また、本学部に入学期生数名を各グループにファシリテーターの役割を持たせて加わらせた。

ロールプレイは、次のように進めた。まず、ロール毎にグループを作り、「宮崎県の茶業の活性化案」を考えてもらい、ロールの立場や考え方に慣れさせる段階を設けた。その後、各ロールから1名ずつ集めたグループを作り、改めて活性化案をさせた。また、グループワークの時間が6割程度進んだ段階で、自治体職員のロールの受講者を他の教室に移動させ、そこで初めて自治体職員が活性化案の審査員であることを告げた。生産者ロールと流通業者（茶商）ロールの受講者にも、同じくこのタイミングで自治体職員が審査員であることを告げた。こういった仕掛けは、受講者を飽きさせないことも狙いの一つではあるが、実際に自治体が選択する立場になることもあることを踏まえたものである。

受講者のコメント・感想では、「地域資源創成学部のイメージはぼんやりしていたが、今回のセミナーに参加して驚いたことがたくさんあった」、「第一部で分かり易い説明を聞き地域資源創成学が理解できた」、「地域を活性化させるためには様々な学問を学ぶことが必要ということを知り驚きました」といった内容のほか、「ロールプレイが楽しかった」という感想も多かつ

た。

これらのコメント・感想から、こういった取り組みは地域資源創成学部の特徴である多角的視点とその意義を伝える点では効果があるのではと推察された。しかし一方で、本来は第1部の座学にもう少し時間をかけて受講者の深い理解を促す必要があるが、時間が限られるために、それが難しいという点が課題として挙げられた。各グループの地域活性化案も、多角的な検討が十分になされていないものが多かった。つまり、対象が高校生であること、座学に時間をかけられないことから、このようなワークショップで学部の特徴は伝えられても、実際に受講者が多角的な観点から活性化案を考えられるようになるには不十分と考えられた。

1.4 大学一年生のための地域資源創成学入門セミナー（2018年2月）

2016年に実施した2回のセミナーは、新設学部である地域資源創成学部の特徴を県内の高校生に正しく理解してもらうためという目的があり、二期生または三期生となる学年を対象とした入試広報の性格を有したものであった。従って、本学部の特徴だけでも伝えられれば、十分に目的は果たせたと考えられる。しかし、実際に一期生及び二期生が入学し、講義や実習等で教育を進める中で、実際に本学部に入学者の学生においても、多角的視点についての理解が十分ではないことに気がついた。

そこで、1年次後期の科目「専門教育入門セミナー」の一環として、2018年2月に地域資源創成学入門セミナーを実施することにした。まずセミナー3日前に、ロールプレイ形式のグループワークの注意点やタイムテーブル、そして設定したテーマや登場するロール、活性化案における制約条件等を受講生に説明した。その上で、班分けを行い、各受講者のロールを班内の話し合いで決定していった。これは、セミナー当日の時間をなるべく有意義にするための措置であると同時に、テーマを発表することで受講者たちに予習を促すためである。

2016年11月に実施した高校生対象のセミナーと比べて、この時のロールプレイの大きな変更点は3つある。1つ目は、「プロジェクトマネージャー」ロールを作ったことである。宮崎県や茶業を知らない地域外の人として、プロジェクトのまとめ役を担わせた。2つ目は、「地域活性化案」を考える上での必須項目とその選択肢を限定したことである。現実離れた発想や飛躍した発想にならないよう、活性化案に入れて欲しい最低限の項目を挙げた。こういった制約条件がなければアイデアを出すだけに終始し、多角的な視点から考察する必要に駆られないからである。図1が、地域活性化案を考える上で最低限必要な項目と選択肢を示した選択カード類である。カードには、その選択をした際のメリットやデメリットなどが書かれている。これらの問いに対する選択肢を示しながら、各班の活性化案をまとめるように指示した。3つ目は、前半の座学の段階で、「茶農家」及び「茶商」ロールの受講者には、農業経済学及び栽培学の講義を、「自治体」及び「プロジェクトマネージャー」ロールの受講者にはマーケティング・デザイン及びプロジェクト・マネジメントに関する講義を、それぞれ受講させたことである。ロールによって立場が異なることに加え、前提となる知識も違うことを考慮している。こうして各班には、立場や知識が異なる中で意見を融合し、最良と思われる案にまとめることを課した。なお、図2は、セミナーの際にロールごとに配布したロールカード類で、そのロールの行動原理や課題などが書かれている。これを各受講者に持たせて、意識付けをより徹底するようにした。

➤ どちらの茶を使うか

<p>何を生産する？</p> <h2 style="text-align: center;">煎茶</h2> <p> ♪産に大躍し生産中で経験豊富 ♪ライバルがたくさん ♪生産効率は釜炒り茶の3倍 ♪密着無地産地としてのブランドイメージが浸透していない </p>	<p>何を生産する？</p> <h2 style="text-align: center;">釜炒り茶</h2> <p> ♪生産効率は煎茶の1/3 ♪大量生産するには新たな機械の購入が必要 ♪釜炒りの機械で烏龍茶、紅茶も作れる </p>
--	--

➤ どのような商品にするか

<p>どのような製品を売る？</p> <h2 style="text-align: center;">茶葉</h2> <p> ♪流通させやすい ♪ライバルが多い ♪若者にとって、ちょっと面倒 ♪イメージは良い ♪ペットボトルに比べて製造コストは低め </p>	<p>どのような製品を売る？</p> <h2 style="text-align: center;">ペットボトル</h2> <p> ♪流通させやすい ♪ライバルが多い ♪消費者にとって手軽で便利 ♪茶葉に比べて製造コストは高め </p>	<p>どのような製品を売る？</p> <h2 style="text-align: center;">食品</h2> <p> ♪いろいろなアイデアの可能性 ♪消費者に合わせた食品開発 ♪ライバルは多くない ♪加工・包装コストがかかる ♪専門外の知識や技術が必要 </p>
---	--	---

➤ どのような市場がターゲットか

<p>ターゲットとなる地域は？</p> <h2 style="text-align: center;">国内 (県内)</h2> <p> ♪県民として地元へ愛着 ♪増し、ある程度の需要はある ♪コストが少ない ♪人口は非常に少ない、人口減少 </p>	<p>ターゲットとなる市場は？</p> <h2 style="text-align: center;">国内 (県外)</h2> <p> ♪人口は地方より多いけど人口減少 ♪通商圏は、産地としてのブランドイメージが浸透していない ♪昔からの流通ルートはある ♪輸送コストがかかる </p>	<p>ターゲットとなる市場は？</p> <h2 style="text-align: center;">海外 (アジア)</h2> <p> ♪人口は非常に多い、人口増加 ♪輸送コストは超える ♪日本の製品に対する信頼がある ♪茶の文化がある ♪言葉の壁 </p>	<p>ターゲットとなる市場は？</p> <h2 style="text-align: center;">海外 (欧米)</h2> <p> ♪人口は非常に多いけど遠い ♪基本は紅茶の文化 ♪健康志向 ♪輸送コストが超超かかる ♪言葉の壁 ♪日本文化に興味ある人は多い </p>
--	---	---	--

➤ どのように流通させるか

<p>販売方法は？</p> <h2 style="text-align: center;">量販店</h2> <p> ♪大量販売が実現できれば利益を安定して得られる ♪消費者のニーズは掴みにくい ♪知られる機会は多くなる </p>	<p>販売方法は？</p> <h2 style="text-align: center;">直売 (店舗)</h2> <p> ♪生産者の顔が見える安心感 ♪消費者のニーズを掴める ♪流通コストが少ない ♪知られる機会は少なくなる ♪手間暇がかかる </p>	<p>販売方法は？</p> <h2 style="text-align: center;">ネット通販</h2> <p> ♪世界中のお客様と直接やり取りできる ♪勝手に出しやすい ♪店舗を持たなくてよい ♪ネットの知識や管理費が必要 </p>
---	--	--

➤ ターゲットの年齢層は

<p>ターゲットとなるヒトは？</p> <h2 style="text-align: center;">年配女性</h2> <p> ♪健康に関心があるから ♪それなりに経済的な余裕があるから ♪昔ながらの日本人の嗜好、急須でお茶を飲む習慣がある </p>	<p>ターゲットとなるヒトは？</p> <h2 style="text-align: center;">年配男性</h2> <p> ♪健康に関心を持っているから ♪それなりに経済的な余裕があるから ♪昔ながらの日本人の嗜好、急須でお茶を飲む習慣がある </p>	<p>ターゲットとなるヒトは？</p> <h2 style="text-align: center;">老若男女</h2> <p> ♪より多くの人に買ってもらうから ♪消費者の好みや、期待されている期間に合わせていく </p>	<p>ターゲットとなるヒトは？</p> <h2 style="text-align: center;">若い女性</h2> <p> ♪健康に関心があるから ♪あまり経済的な余裕はないから ♪急須で飲む習慣はない ♪便利なものが好きから </p>	<p>ターゲットとなるヒトは？</p> <h2 style="text-align: center;">若い男性</h2> <p> ♪健康に関心があるから ♪あまり経済的な余裕はないから ♪急須で飲む習慣はない ♪便利なものが好きから </p>
---	--	--	---	---

図1 「大学生のための地域資源創成学入門セミナー」実施時の選択カード類

<p>あなたのロールは…</p> <h2 style="text-align: center;">茶農家</h2> <p> 目標 産業の存続 役割 お茶の生産 行動 ♪自分の生産したものを、高く評価されたい ♪買っていただけるだけの確信は欲しい 課題 ♪ 需要の予測が難しい ♪ 消費者ニーズをつかむのが困難 </p>	<p>あなたのロールは…</p> <h2 style="text-align: center;">茶商</h2> <p> 目標 利益の最大化 役割 お茶の販売 行動 ♪ 需要を拡大したい ♪ 販路を拡大したい ♪ 他社ブランドを取りたい 課題 ♪ 競合の価格競争が激しい ♪ 消費者の嗜好が読めない </p>	<p>あなたのロールは…</p> <h2 style="text-align: center;">自治体</h2> <p> 目標 地域の活性化、地域の維持と発展 役割 茶農家・茶商のサポート 行動 ♪ 協賛に依頼する ♪ 協賛の維持管理を徹底して欲しい ♪ 地域でもっとも大事にして欲しい 課題 ♪ 財政の厳しさで継続が難しい ♪ 茶商の認知度が低い </p>	<p>あなたのロールは…</p> <h2 style="text-align: center;">プロジェクトマネージャー</h2> <p> 目標 実現可能なプロジェクトにまとめる 役割 ロール別の調整 行動 ♪ 協賛のあるプロジェクトを作りた ♪ 協賛のあるビジネスモデルを作りたい 課題 ♪ 地域の人とつながりがない ♪ 茶の専門家が少ない </p>
--	--	--	--

図2 「大学生のための地域資源創成学入門セミナー」実施時のロールカード類

結果として、学生らが作った活性化案の中には、実現不可能なものや、ターゲットとなる市場と選択した流通方法が矛盾しているものなどがあり、活性化案としての質が良いとは言えないものが多かった。しかし言い換えれば、このように回答するべき項目と選択肢を示すことで、そうした基本的且つ現実的な指摘が出来るようになったとも考えられる。少なくとも、十分な

知識や経験を持たず、そして多角的視点から捉えようという意識が高くない高校生や大学一年生らを対象とする場合は、項目や選択肢を示した方が教育的な指導は容易だと考えられる。

一方で、受講した学生には、このグループワークで自分が出来たことと出来なかったこと、そして感想（特にロールプレイ方式のグループワークを体験して感じた改善点について）について、回答してもらった。出来たこととしては、「議論の中で以前より自分の意見を言うことが出来るようになった」、「互いの意見を尊重しながら議論することができた」などの意見が多かった。出来なかったこととしては、「ロールの立場からの意見にはなっていなかった」、「ロールによって意見が違うのでまとめることが出来なかった」ということを挙げる学生が多かった。学生自身の自己評価からは、自分の意見を述べ、皆の意見も聞いて議論するという基本的なスキルが身に付いてきたと感じている学生が多いことが分かる。しかし、自分ではなく他者の立場に立って考えるというスキルと、ロールの設定によって作られたトレード・オフ関係の下で意見をすり合わせるというスキルは、この段階では難易度が高すぎたとも考えられる。

その他の感想として、「とても面白かった」というコメントと、「様々な側面を理解する必要があって難しいと感じた」、「ロールや項目の説明をもっと詳しくして欲しかった」、「話し合う時間をもっと長くして欲しい」という意見が多かった。時間が足りなかった点についてはプログラムの反省点であるが、単なる飛躍したアイデアの提案で終わることなく、様々な見方や考え方があること、それを深く理解すること、その上で活性化案を導くことが重要であることに気付いたからこそ、時間が足りないという意見が出てきているとも言える。一年を通して学んできた学部教育の成果も多分にあるだろうが、このセミナーも学生らに複眼的視点の必要性を実感させられたのではないだろうか。

2. 学際性を踏まえた「地域資源創成学」に関する一考察

最初に挙げた2つの課題の内、「学際性を有する学部であることを高校生（大学一年生）らに伝えることが難しい」という課題に対して、「地域資源創成学入門セミナー」と銘打って実施した3つの取り組みは、十分とは言えないまでも、多少は伝わり易くなったものと考えられる。少なくとも、地域資源創成学部が複数の専門分野で構成され、様々な側面から物事を見る複眼的視点を養い、その上で最適解を求めるスキルを習得するための学部であることや、もしくは一面的なもの見方では地域の課題は解決しない、ということは伝えられたと考えられる。

一方で、「地域資源創成学の異分野融合」を教員自身が体現していないので、ロールモデルが提示できないという課題は残ったままであった。このセミナーにおける教育プログラムの構築を通して、教員は各専門分野の立場から「連携」して教育に取り組んだが、異分野が融合して学問として成立したということではない。この課題について、本章で考察する。

2.1 「地域資源創成学」の学際性

地域資源創成学部は、地域における課題の理解と解決を目的とした知識やスキルを身に付ける学部である。この場合の知識やスキルは、まずは既存の学問分野の中で培われてきたものの中から抽出されることになる。実際には、教育や研究の積み上げの中で、徐々に必要な知識やスキルが取捨選択され、充実していくのだろう。そしていつしか体系的に整理され説明できるようになり、「地域資源創成学」が一つの学問分野として確立するに至るのではないだろうか。

応用科学である工学や農学、医学、薬学、経営学などは、このような過程を経て、現代において一つの学問分野として確立している。これらの応用科学は、真理を追究することで確立されてきたのではなく、ある課題に対応するためという目的が先にあり、そのための知識やスキルが体系的に整理されてきた。従って、その課題の特性に近い、いくつかの学問分野が中心的な役割を担っている。例えば、医学や薬学、農学は、主に生物学や化学の知識やスキルが基盤になっている。工学は、基礎科学として主に物理学や化学、数学が基盤となっているが、人類の歴史の中で経験的に積み上げられてきた様々な技術が、学問に昇華した一面もある。しかし当然ながらそれだけではなく、いわゆる理系の学問といわれる農学も工学も、課題解決に必要であれば、人文・社会科学系の学問とされている経済学や社会学などで生み出された知識やスキルを貪欲に吸収してきた。

では、環境科学のように比較的新しい学問分野ではどうだろうか。20世紀後半に社会問題化した公害や地球環境問題を契機として、環境問題解決の取り組みが既存の学問分野の中で起こり、環境を専門とする研究者や教育機関が現れ、そして現在では環境科学という分野が確立された。この過程で、工学や農学などの理系の学問分野と、経済学や社会学などの文系の学問分野が、いずれも環境問題の解決に取り組み、現在の環境科学の礎となっている。つまり、既存の様々な学問分野の知識やスキルを「環境問題」という切り口で体系的に整理したものが、環境科学となっている。従って、環境科学を専攻する多くの学部・学科のカリキュラムでは、理系・文系の両方の科目で構成されている。こうした学部・学科で環境科学を学ぶ学生も、いずれは環境科学の中で専門分化した特定分野の専門性を中心に習得するため、ゆるやかに理系・文系に区別されることはあるが、環境科学そのものに理系・文系の区別はないと言えよう。

地域資源創成学は、まだ整理・体系化されていないこれからの学問分野という状態であるが、重要な点は既存の学問分野の知識やスキルを、どのような切り口で抽出していくのかであろう。そして、高校生や大学生などへの説明では、「地域資源創成学」の切り口と既存の学問分野がどのような関係にあるのかを、分かり易い形で提示することが当面の課題である。

2.2 「地域資源創成学」の位置付け

「地域資源創成学」の切り口について考える前に考慮すべきこととして、「地域学」との関係が挙げられる。そこで、まずは「地域学」の捉え方について紹介しておく。

例えば鳥取大学地域学部の教育理念では、「既存の学問体系を『地域』の視点から再構成し、地域に存在する様々な公共課題の解決を目指す」⁽²⁾ものとしている。更に、同学部の柳原は、「地域学」を次のようにまとめている。

「いのちをいただき、いのちをいかす」こと、「自然とともにあるいのちを生かしきる」ことを究極の目標に、「誰もが、一人ひとりが、人として生きやすい状態」の実現を目指して、地域の構造と特性を客観的に把握しつつ、人の暮らしと一人ひとりの思い（意思・欲求・願望）を重視して、「現実の地域」に内在する諸問題を探り出し、その解決を図ること、5つの視点から「望まれる地域」の実現に寄与すること⁽³⁾。

5つの視点とは、「移動の視点」、「客観的・構造的視点」、「生活からの視点」、「〈わたし〉の〈いま、ここ〉からの視点」、「歴史的視点」であり、詳細は原著を参照して欲しい。なお、「地

域科学」という分野も存在する。これについて柳原は「地域を経済主体と捉えて、経済の観点から地域を分析し、その発展を実践的・政策的に考えるもの」とし、「地域学」では「客観的・構造的視点」として組み込んでいると説明している⁽⁴⁾。これらの説明から、人文学や社会科学の学問分野が「地域学」の中心的役割を担っているのではと考えられる。同じく鳥取大学地域学部の家中は、2019年1月25日に宮崎大学で行われた講演で、科学者や専門家だけではなく地域の多様な主体によって培われた知見も「地域学」を構成するものであり、「学際/インターディシプリナリー」よりむしろ「超学際/トランスディシプリナリー」と捉えられると述べている。つまり、「地域学」は理論の体系化を目指して確立するのではなく、「実践の学」として地域に関わる様々な知識やスキルなどがまとめられたものであり、柳原はこのことを「地域学に輪郭を与える」という表現を用いて述べている⁽⁵⁾。

「地域学」に対して「地域資源創成学」は、その名称が示すように「地域資源」に焦点を当て、地域の諸問題を探り出し解決を図るものであろうと考えられる。いずれの学問分野も、既存の学問分野を再構成する学際性を有していることは明らかである。ただし、「地域学」は「地域」が指し示す対象や現象が幅広く、また地域の多様な主体で生産される知見をも取り込んでいるため、実際の教育や研究においては議論が拡散しやすいという課題があるだろう。これに対して「地域資源創成学」は、具体的な「地域資源」を対象とし、各専門家の知識を活かして理解を深め、その資源を実践的に活用する方法までの一連の流れを学ぶことで、「地域学」が課題としている議論の拡散を防いでいる。「地域資源創成学」において、「地域学」は基盤となる重要な知見を与える存在であるが、「地域資源」という具体的な切り口を設定することで、様々な学問分野の具体的な知見やスキルの連携や融合が図り易くなるのではないだろうか。

京都大学学際融合教育研究推進センターがまとめた『異分野融合、実践と思想のあいだ。』では、課題解決のために異分野の専門家が協力するのが「連携」であり、異分野の専門家が対立する考えをぶつけ合い、自らの世界観を見つめ直して各々の内側で再構築していくことが「融合」であると述べている⁽⁶⁾。つまり、「地域資源創成学」の構築のためには、本学部の教員が中心となって「地域資源」という切り口から様々な研究活動を展開し、各々の専門分野をベースにしながら活発に議論する中で共有できる知識やスキル、考え方などを見い出していく必要がある。そして、それを体系的に整理し、学生に分かり易く教授していくことを積み重ねられれば、教員や学生らの内側で異分野連携の状態から徐々に融合が進み、「地域資源創成学」という専門分野の基盤となっていくだろう。

おわりに

本稿では、2016年に新設された宮崎大学地域資源創成学部の教育を、高校生らに分かり易く説明するために取り組み始めた「地域資源創成学入門セミナー」の経緯と成果、そして課題をまとめたものである。「地域資源創成学」に限らず、近年の社会問題が学際的な性質を有しており、その解決のために学際性のある学問分野が立ち上げられているが、それが学問分野として確立されるまでには専門家の忌憚ない活発な議論が必要になる。鳥取大学地域学部の「地域学」のように、非専門家の知恵や技術も積極的に取り入れることもあるだろう。しかしいずれにしても、このような課題対応型の応用科学として学問分野を立ち上げるには、試行錯誤を繰り返し、長い年月の間にそのディシプリンが有用であるか検証がなされ、その果てに確立さ

れるものであると考える。そしておそらく、こういった試行錯誤や議論を怠った学問分野や新設学部は、いつの間にか消失してしまう。異分野の専門家間で議論することは容易ではないが、例えば「地域資源創成学」については誰もが未だ非専門家である。自らの専門性をベースにしながらも、謙虚な姿勢で活発に議論することが必要だろう。

筆者らが取り組んだセミナーは、「地域資源創成学」の内容について踏み込んだものではない。しかし、このセミナーに関わった教員の間では、その後共同研究を立ち上げるなどして、「地域資源創成学」に関する議論が活発に交わされている。本学部の創設期にこのような取り組みを行ったことは、十分に意義があったものと考ええる。また、今後もこのセミナーを改良し、学部の広報活動や学生教育の中で活かしていくべきであろう。

本稿は、学部創成期に「地域資源創成学」を理解し説明するために行った取り組みと、それに関わった教員の中で交わされた議論の一部を紹介したものである。今後の学部にとって参考になれば幸いである。

注・文献

- (1) 首相官邸ホームページ . (2013) 教育再生実行会議第三次提言「これからの大学教育等の在方について」 https://www.kantei.go.jp/jp/singi/kyouikusaisei/pdf/dai3_1.pdf (2018.12.22 閲覧)
- (2) 鳥取大学地域学部・地域学研究科ホームページ . http://www.rs.tottori-u.ac.jp/about-gakubu/chiikigaku_policy/index.html (2019.1.21 閲覧)
- (3) 柳原邦光 . (2018) 「地域学入門」 地域学論集 (鳥取大学地域学部紀要) 第14巻, 第2号 .
- (4) 同上
- (5) 同上
- (6) 京都大学学際融合教育研究推進センター . (2015) 『異分野融合, 実践と思想のあいだ。』 京都大学学際融合教育研究推進センター発行 (非売品)